

第6学年 国語科 学習指導案

奈良教育大学教職大学院専門職学位課程（高取町立たかむち小学校 教諭）

伊藤 輔

1. 単元名

仮名の由来はどこから？～万葉仮名から学ぶ私たちの言葉～
（「日本の文字文化」光村図書6年）

2. 単元の目標

- ・万葉仮名を通して、仮名の由来について理解することができる。
(知識及び技能)
- ・万葉仮名と平仮名や片仮名を比べながら共通点や違いを見つけることができる。
(思考力, 判断力, 表現力等)
- ・昔の人々が, どのような思いから万葉仮名で歌や木簡を作ったのか考えることができる。
(思考力, 判断力, 表現力等)
- ・言葉がもつよさに気付くとともに, 国語の大切にして, 思いや考えを伝え合おうとする態度を養う。
(学びに向かう力, 人間性等)

3. 単元について

(1) 教材観

現代を生きる私たちは、仮名文字に囲まれて生活をしている。看板で見る文字、スマホで見る文字、教科書など文章で見る文字など様々であり、伝える媒体も紙や電子メールなど様々である。しかし、当たり前のように文字に触れることができ、簡単に言葉を発信できることにより、その一つ一つの文字や言葉に対して無責任になってしまったり、価値を見落としがちになったりしているように感じる。今回、「日本の文字文化」という教材において、万葉仮名を通して仮名の由来について考える機会をもつ。そして、改めて仮名がどのように生まれてきたのか、言葉で繋がることの良さを児童が感じることにより、古より大切にされてきた文字の良さ、言葉の重要性に気付いてもらいたいと考え、今回の授業提案を計画した。

仮名の由来に関わることとして、平成29年度小学校国語学習指導要領解説編、第5学年及び第6学年【知識及び技能・(3)我が国の言語文化に関する事項】では、次のように示されている。下線部は筆者によるものである。

(3)我が国の言語文化に関する事項

○言葉の由来や変化

ウ 語句の由来に関心をもつとともに、時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気付き、共通語と方言との違いを理解すること。また、仮名及び漢字の由来、特質などについて理解すること

さらにその説明として、「具体的には、仮名や漢字がどのように形成され、継承されてきたのかなどについて基本的な知識をもつこと、また、表音文字としての平仮名や片仮名、表意文字としての漢字の特質を理解すること」とある。仮名に着目して抽出すると、①仮名の形成、継承について基本的な知識の習得、②表音文字としての平仮名・片仮名への理解が児童に求められると捉えることができる。

学習指導要領解説の内容と関わり、現行の国語科6年生教科書(光村図書)では「日本の文字文化」の単元【資料1】が設定されており、そこでは仮名の由来についていくつかの説明がある。特に、万葉仮名に関して、「仮名がない時代には、日本語の発音を表すために、漢字の音を借りて表すなどの工夫がなされました。」と記述があり、また、万葉仮名をくずして平仮名が作られ、万葉仮名の形の一部を取って書くことから片仮名が生まれたことについても言及されている。平仮名や片仮名、漢字など文字を駆使して今の時代に生きる私たちにとって仮名の原点を知ることができるという点で、この教材は非常に価値のある学習である。しかし、仮名の由来の中でも特に万葉仮名についてはこれ以上の詳しい説明がないため、“知る”ことにとどまり、“理解”というレベルまで学びが深まるとは考え難い。また、前回の教科書までは万葉仮名を説明する一覧表が掲載されていたが、令和6年度の教科書からはQRコードを読み込むことでPDFの資料【資料2】が読み込むことができるようになっている。

今回、仮名の由来について学習するにあたり、万葉集の歌碑が数多くある場所があり、万葉仮名について学ぶことができるという地理的条件を生かし、万葉仮名について実際に見たり、触れたりする機会をもつようにしたい。そして、仮名の由来への関心を高めるような体験をすることにより、児童の文字への理解、さらに言葉への理解が深まるのではないかと考えた。

(2) 児童観

本校がある高取町は、歌人である阿波野青畝生誕の地とされ、俳句作りがさかんに行われている。毎年、阿波野青畝を偲ぶ俳句コンテストが開催され、子どもたちは小学校1年生の段階から俳句作りに取り組んでいる。そのため、言葉や文字にこだわりながら俳句を作成したり、俳句を詠んだりすることに対して慣れ親しんできた。また、本校では春の遠足で明日香村周辺を歩く。1・2年生は明日香近隣公園、3年生は高松塚古墳、4年生は甘樫丘、6年生は石舞台をスタートにして明日香村のフィールドワークを行う。5年生は野外活動のため、春の遠足へは行かない。明日香村を歩き、石舞台古墳や飛鳥寺といった歴史的建造物を見るだけでなく、数々点在している万葉集の歌碑と出会える機会やその起源を知ることができる環境にある。

しかし、児童が仮名の由来を含む文字文化に関心が高いとは言えない。自分たちが普段から話している言葉や書き表している言葉に対して「なぜ、漢字や平仮名、片仮名が生まれてきたのか。」「どうして、日本では様々な文字を使い分けながら書いているのか。」という意識をもって生活しているかという疑問が残る。今回の授業をきっかけとして、私たちが普段から使っている文字がどうやって生まれてきたのか、どのような思いで万葉仮名が作られたのか、文字の大切さについて改めて考えられるようになってほしい。

(3) 指導観

本単元に関わり、まず3年生や4年生の遠足において、万葉集の歌碑があることを確認しておく。その存在について確認しておくことにより、ただの石碑ではなく、「何か意味のあるもの」という認識を持たせるようにする。

第1次として、6年生の遠足の際には明日香村のフィールドワークを行い、橘寺や飛鳥寺、石舞台といった歴史的建造物だけではなく、万葉集の歌碑についても探すようにする。特に志貴皇子の歌碑【資料3】に関しては、児童のフィールドワークのコースとして通りやすい場所にある。そこで、その歌碑に書いてある文字をワークシートに視写させるようにする。その活動を通して、文字に対する気付きや疑問を持たせるようにする。

第2次では、春の遠足で感じた気付きや疑問を学級で共有し、各自で chromebook や図書資料を使って調べ学習を行う。その後、万葉文化館を訪れ学芸員の方々から万葉仮名がどうやってできたのかワークシート【資料4】を使って学習する。また万葉仮名で書かれた木簡などを見ることを通して、当時の人々の文字文化について学ばせていただく機会をもつ。体験的な活動や調べ学習を行うことで、実際に五感で感じる様々な物事は、児童の記憶に残り、次時の活動にも効果的に発展していくことができる。と考える。

そして、第3次では、国語の教科書に掲載されている「日本の文字文化」を学習する。その際、遠足や万葉文化館での学びがつながりのあることとして振り返らせることにより、万葉仮名の存在が関連してくる。私たちが普段使っている言葉と万葉仮名との共通点や違いについても見つけ、言葉に対する見方・考え方を広げさせるようにする。その際、平仮名や片仮名の字源表【資料5】を活用しながら学習を行う。

最後に、第4次では、万葉文化館の方に教えてもらいながら、木簡に自分の大切な人に万葉仮名でメッセージを書いてみるという活動を行う。ただ万葉仮名を書くだけでなく、第2次で学んだように、平仮名や片仮名との共通点や違いについて意識しながら取り組めるようにする。併せて、木簡が縦書きで書かれている点にも着目し、日本の文字は縦書きが多いことにも確認するようにする。木簡を書く活動や第1次で読んだ歌碑など、平仮名や片仮名が無かった時代において木簡や万葉集の歌をどうして作ったのか、そこには作った人のどのような思いが込められていたのかについてもみんなで考えるようにする。話すための言葉はあっても、遠くにいる人たちに伝えるための文字がなかった時代に仮名を生み出していった人々の工夫や苦勞，思いを感じさせるようにしたい。この活動は、体験や学習を積み重ねてきた児童であるからこそたどり着ける境地であると私は考える。古の人々への思いを巡らせることを通して、昔から大切にされてきた私たちの仮名の由来を学ぶだけでなく、言葉の持つ力に気付かせるようにしたい。

(4) ESD との関連

○学習を通して主に養いたい ESD の視点

- ・責任性：万葉集の歌碑を読むという学習を通して、万葉集が受け継がれてきた歴史を知るとともに、仮名の由来についての理解を深め、言葉を大切に

生活していこうとする態度を育てる。

- ・相互性：万葉集の歌碑や数々の寺社仏閣や遺跡があることによって、明日香村の環境が保全されてきたことを知る。

○学習を通して主に養いたい ESD の資質・能力

- ・コミュニケーション能力：

万葉仮名の気付きを学級の友だちと意見交流を行い，そのことを通して言葉に対する考えを広げ，深めることができるようにする。

○学習で変容を促す ESD の価値観

- ・世代間の公正：昔の人々が万葉仮名を通して自分たちの想いを表現してきたことを知り，言葉を大切に生活していこうとする意識をもつ。
- ・人権・文化の尊重：なぜ，万葉集や木簡が受け継がれてきたのか，仮名の由来という視点から考える。

○関連する SDG s の目標

- ・目標 4 【質の高い教育をみんなに】
- ・目標 11 【住み続けられるまちづくりを】

4. 単元の評価規準

ア，知識・技能	イ，思考・判断・表現	ウ，主体的に学習に取り組む態度
①万葉仮名を通して，仮名の由来について理解しようとしている。	① 万葉仮名と平仮名・片仮名を比べながら共通点や違いを見つけようとしている。 ② 昔の人々が，どのような思いで歌や木簡を作ったのか考えようとしている。	① 体験的な活動を通して，自らの気付きや疑問をもち，積極的に言葉への理解を深めようとしている。 ② 言葉がもつよさについてすすんで考え，気付きを伝え合うことを通して，言葉を大切にしていこうとしている。

5. 単元の指導計画（全8時間）

次	主な学習活動	学習への支援	○評価備考
1 ① ②	○春の遠足で明日香村のフィールドワークを行い，歌碑についての気付きや疑問をもつ。 ・万葉集の歌碑はなぜこんなところにあるのだろうか。 ・ここに書かれてあることはどんな意味なのだろうか。	・歴史的建造物だけでなく，万葉集の歌碑についても確認をさせるようにする。 ・歌碑に書いてある文字について気付きや疑問をもたせるようにする。	○ウ① 主体的

<p>2 ③ ④</p>	<p>○万葉集や万葉仮名について学習する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・chromebook や図書館の資料を活用して、万葉集の歴史や歌碑の意味について調べる。 ・万葉文化館を訪れ、館内を見学させていただいたり、歌碑や木簡など万葉仮名について学芸員の方の話を聞いたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・気付きや疑問を基にして調べ学習を行い、できるところまで疑問の解決を図らせるようにする。 ・万葉仮名の一覧を使って、歌碑を読ませる。 ・万葉集成立の歴史や万葉仮名について教えていただいたことをメモするだけでなく、万葉集や寺社仏閣など、古の歴史と明日香村が共存していることを意識させる。 ・万葉仮名を使って、和歌を完成させるなど、児童が万葉仮名に興味・関心をもてる活動に取り組みさせる。【資料4】 	<p>○イ① 思判表 ○ウ① 主体的</p>
<p>3 ⑤ ⑥</p>	<p>○「日本の文字文化」を学習する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・万葉仮名と平仮名について調べるグループと片仮名について調べるグループで分かれ、意見交流を行う。 ・万葉仮名と平仮名・片仮名の共通点や違いについて考えさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・仮名の由来について学習し、平仮名が万葉仮名をくずして作られ、片仮名は万葉仮名の形の一部から生まれたことを理解させる。 ・自分たちの使っている文字が漢字の形や一部分を取って作られていることを意識させる。 	<p>○ア① 知・技 ○イ① 思判表</p>
<p>4 ⑦ ⑧</p>	<p>○木簡に文字(自分の大切な人へのメッセージ)を書いてみる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分にとって大切な人って誰だろうか。どんなメッセージを伝えたいだろうか。 ・なぜ、万葉仮名を使って言葉を伝えようと思ったのか考える。 ・活動のふりかえりを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の大切な人へのメッセージを木簡に書かせる。 ・万葉仮名の歌や木簡がなぜ作られたのか考え、なぜ仮名が生まれてきたのか考えさせる。 ・話し合っ出て意見をお礼の言葉と共に万葉文化館の学芸員の方に伝える。 	<p>○イ② 思判表 ○ウ② 主体的</p>

【資料5】平仮名・片仮名字源表（米田猛先生より提供）

7. 成果と課題

<成果>

万葉仮名や万葉集について体験的な活動を行うことができるという学校の環境条件を生かしながら、仮名の由来についてより深く学ぶ計画を立案できた。また、万葉文化館の方々の力をお借りしながら専門的な知識も得られることにより、児童は教科書から学ぶことを越えて、万葉仮名についてより深い学びを得ることができると考えられる。本学習は仮名の由来について考える学習にとどまることなく、児童が日常的に使う言葉の大切さや言葉に込められる思いを考えるきっかけとなりうる。

<課題>

外部人材との連携が課題として挙げられる。今回の授業計画は奈良教育大学の万葉集を活用した授業づくりセミナーに参加する中で、万葉文化館の方々に出会い、万葉仮名に関わる知見を得られたことが構想の起点となっている。こういった内容でお話したいのか、どのような物を見せていただきたいのか、細部の打ち合わせが必要な点が難しいと考えられた。また、万葉仮名や字源表には、未履修の漢字が数多く登場しているので、そのため大型モニターで情報を共有したり、個別で読み方を教えたりするなど、児童に苦手意識をもたせないように工夫する必要がある。